

側に一群ずつのサルを確認した。道路周辺の75%の植物個体は、サルの食物と確認されている種類だった。したがって、サルは、猿害期以外でも果樹園周辺に存在し、自然食物が農道周辺にあることが確認された。この結果は、猿害群の生態についての、より規模の大きな研究のための基礎となる。来年度は植生調査をさらにすすめ、集落周辺でのサルの活動と自然食物の利用可能性の周年性について検討する予定である。

計画 5-4 中国地方東部におけるニホンザル地域個体群の分布調査

渡邊義雄（美作女子大）・林 勝治（広島県大）

中国地方東部において、ニホンザルの分布調査を行った。岡山県では、群れの生息が確認されている、井原市、芳井町、備中町、哲西町、高梁市、北房町、落合町、美甘村、新庄村の9市町村で聞き取り調査を行った。これまでより、群れの生息域が明確になった。また、広島県との県境を越えて生息している集団も確認できた。しかし、どの集団も直接観察による確認はできていないので、個体数は明らかでない。推定では、岡山県内に22集団800頭余りが生息していると思われる。今年度までの調査で、県内のほとんどの地域を調査できた。未調査の地域に関しても、繁殖集団の生息はほとんど見込めないで、主な生息地は捉えられたと思われる。岡山県では、集団の生息地は県西部に偏っていることが分かった。

聞き取り調査では、岡山県内でもサルによる農作物への被害が増えている。被害の多い高梁・井笠・阿新・東備の各振興局に被害対策について問い合わせたところ、具体的な計画は立てられていないようだった。一方、真庭振興局管内の落合町、美甘村、新庄村地域では農作物被害への対策が進められており、これから地元民の協力によりサルの行動域の情報も集められると思われる。

計画 5-5 中高度域におけるヤクシマザル調査法の検討と人口学的資料の収集

好廣眞一（龍谷大・経営）
・大竹勝（犬山市・愛知）

1998年より、屋久島西部、瀬切川・大川流域の照葉樹林・ヤクスギ林移行帯にすむヤクシマザルを継続調査し、個体群動態のメカニズム解明を試みている。2001年8月5日～16日に、標高850-1350mの7.5km²の地域を、ブロック分割定点調査法を用いて調査した。

調査域に12・13群が出現し、うち4群と今年新たにBR群の計5群を識別した。5群のうち、HR群は全頭個体識別されている。PE群とOM群は、集団（近接して一緒に遊動しているサルの集まり）の全数カウント数が複数

あり、SY群とBR群は集団のほぼ全数のカウントが得られた。5群の個体数、新生児数、オトナメス数は次のとおりであった。HR群：24, 2, 9。PE群：14, 0, 5。OM群：12, 2, 5。SY群：17, 1, 6。BR群：24, 4, 8。5群の新生児数は計9頭で、オトナメス数33頭の27%であった。

計画 5-6 黒部川流域に生息するニホンザル地域個体群の動態（ダム建設に伴う遊動域の変動）

加藤 満（愛知県立瀬戸高）

富山県宇奈月町の黒部川流域に生息するニホンザル自然群を対象にして、ダム建設に伴う遊動域の変動を調査した。

99年10月にダムの貯水が始まって約2年が経過し、最も影響を受けたON群、MO群、MT群3群はホームレンジをダムの下流域へと拡大させてきた。今年度の調査ではMO群のホームレンジは前年度とほぼ変わらなかったが、MT群は1800m、ON群は7000m下流域へホームレンジを拡大させた。このMT群とON群の下流域への遊動は冬期に観察された。特にON群のホームレンジは、この大きな移動によりこれまで最下流に位置していたOHA群を越えて、黒部川最下流に位置することになった。

ダムの貯水以降、これら3群の黒部川に沿った下降は、MO群が0.4km、MT群が3km、ON群が10kmである。ON群のホームレンジが下流側へ拡張すると同時に、上流側に位置していたMO群とMT群も下流側へとホームレンジを広げ、黒部川支流の谷のススキ原では採食地をめぐる群れどうしの競合関係が見られるようになっていた。昨年度報告したダムの上流部から下降してきた2つの群れも今年度の冬期調査でダムの中央部で確認された。このように、上流域でのダム建設が、その周辺に生息する群れの下流域への移動を促し、下流側に隣接して分布するON群が下流方向へ大きく移動する原因になっているものと思われる。

計画 5-7 青森県下北郡佐井村に生息する野生ニホンザルの生態調査と保護管理

鈴木克哉（北海道大・文）

本研究では青森県下北半島佐井村に生息し、農業被害を起こすニホンザルY群を対象に農地利用の状況と地域の主な対策法である電気柵の効果について検証した。調査は01年の6, 7, 8, 10, 11月に群れを連続追跡し、15分ごとの位置をポイントデータとしてGISソフトArcviewで分析した。群れの広がりを考慮して実際の農地に50mのパッファをかけ「農地」とした。

群れは昨年までの行動域を大きく南北に拡大させ、